

令和2年度「山形学」講座第2回が終了しました！

今年度の大テーマは「人々は疫病をどう乗り越えてきたか」。第2回は「疫病と向き合う―歴史と文化―」と題して、東北芸術工科大学准教授の竹原万雄氏と、「山形学」企画委員の東北文教大学短期大学部特任教授の菊地和博氏、山形大学名誉教授の松尾剛次氏の3氏をお迎えし、「山形学」企画委員の廣瀬隆人氏を総合司会に講座を開催しました。

今回も、「山形学」2度目のオンライン併用講座となりました。

竹原氏は、明治時代に繰り返し大流行した感染症コレラの山形県内における発生状況やコレラに県民がどのように対応したのかを、当時の新聞等を基に話されました。悪疫退散の祭礼や祈祷などに救いを求める一方、有志の活動や地域の契約などで助け合いながら予防に取り組んだ当時の山形の人々の様子がよくわかりました。特に西田川郡木ノ俣村の事例に感動した受講生が多かったようです。

一方、松尾氏は、不治の病と恐れられたライ病患者の救済に尽力した13世紀仏教者特に忍性（にんしょう）という僧にスポットを当てて、どのような救済活動を行ったのか、時代背景も含めて解説してくださいました。医学が未発達で死は穢れとされていた当時、死（に行く）者の救済、葬送に組織として勇敢に取り組んだ叡尊（えいそん）の活動が、現代の葬式の始まりとなったことなど紹介されました。新型コロナウイルス感染者が差別を受けている現状に触れ、差別をするべきではないと強調されました。

また、菊地氏は、民俗学の観点から県内各地に見られる「疫病」退散祈願について話されました。東根市の「若木（おさなぎ）神社」「疱瘡神社」、米沢市の「虎列刺（コレラ）菩薩」や東根市の「牛頭天王」などの石碑、河北町の「キュウリ天王祭」などの祭礼、舟形町に伝わる「病（やんまい）送り」などの民俗行事などたくさんの事例を紹介され、祭礼や芸能・行事を行うことは地域の感染症予防意識と連帯意識の向上につながり、神社や石碑建立は後世に教訓として伝える文化継承の役割を担っていることなどを解説してくださいました。

今回は3名の講師から、県内の昔の人々がどう疫病に向き合ってきたのか、歴史と文化の両面から学び、理解を深めた大変有意義な講座となりました。

第2回「疫病と向き合う―歴史と文化―」

総合司会：廣瀬隆人氏（「山形学」企画委員）

講師：竹原万雄氏（東北芸術工科大学准教授）

菊地和博氏（東北文教大学短期大学部特任教授）

松尾剛次氏（山形大学名誉教授）

場所：遊学館2階 ホール

日時：令和3年2月28日（日）13：30～15：30

参加者：会場43名、オンライン17名

○当日の様子



☆令和2年度「山形学」講座は、講座終了後に内容をまとめ、講座録“遊学館ブックス”として発刊いたします。これまでの講座も冊子にしており、販売しておりますので、ご興味のある方はぜひご覧ください。